フェアトレードで途上国支援

～ 理念先行から品質重視へ ～

フェアトレード(フェアは「公正な」「公平な」という意味)とは 1960 年代ごろから欧米で始まった途上国支援のための貿易形態のことです。チョコレートとコーヒーがフェアトレードの入り口と言われていますが、衣料やアクセサリーなど、品質やデザインの向上とともに商品は多様化しています。

アフリカやアジア、中南米で作られる農産品、加工品などは、生産者の組織化が未熟なために、安値で買いたたかれることが多いのです。そのため、生産者の生活は貧しく、子どもを学校に通わすこともできない家庭が珍しくありません。フェアトレードは、生産現場での技術指導なども実施したうえで、生産コストや現地の物価などに見合った対価を支払います。そして生産者たちの自立を支援し、子どもたちも教育を受けることができる環境づくりを目指しています。世界フェアトレード機関（WFTO）は、事業の透明性を保つこと、環境に配慮した生産方法をとることなども必要だと提唱しています。

日本のフェアトレード市場は、まだまだ小さいというのが現状です。その理由は、日本の消費者の買い物は、価格・品質を最優先にし、社会的・倫理的な要素が加わることは非常に少ないからです。しかし、東日本大震災を契機に助け合いや連帯が重視され始めたことから、大きく意識が変わる可能性もあります。

フェアトレード実践

旭川商業高生 7、8日販売会

旭川商業高国際ビジネス科3年の生徒たちが、発展途上国の製品を適正な価格で扱うフェアトレードに取り組んでいる。生徒が仕入れから決算までを行い物品を販売する同校伝統の生徒実習販売会（7、8日）では、実際に販売に取り組もうと準備を進めている。生徒の自主性の育成などにも役立っている。

（旭川報道部　斉藤千絵）

商品の値段を決める相談をする生徒たちとローラ・ニクソンさん（左から5番目）

昨年から学習 知識活用へ

自主性育成「社会に役立つ」

ひろば

「この百円、これぐらいの値段なら赤字にならない上ね。」6月28日、放課後の教室に集まった同校の女子生徒たち。アフリカから現地の希望する価格で直接仕入れたお菓子を眺めながら、販売会に向けて作業の真っ最中だった。

フェアトレードについて学んでいるのは、同科の13人。昨年4月、同窓会、産業高校の学習内容とも関連のあるフェアトレードについても知識を深めてきた。

ニクソンさんは「私たちの地域の家庭を訪問しようと、とても一生懸命になってくれた」と振り返る。

今年は、得た知識を周囲に伝え、旭川市内でフェアトレードの商品を販売することを目指してフェアトレードの商品を販売会で普及させることにした。

販売会では、フェアトレードのコーヒーを表す舞うカフェ＆ネパールのエコバッグ、ぬいぐるみなどフェアトレード商品24点の販売や授業時間を使い、関係者との仕入れ交渉などをしてきた。カフェ担当の山口沙織さん（17）は「よろずれば消費者に買ってもらえるのか、真剣に考えるようになった」。グループリーダーの高岡琴羅さん（17）は「ローラ先生の話を直接聞くことができて、自分たちの勉強がどんな人たちに社会の役に立つのか実感が持てた」とやりがいを語る。

生徒たちの取り組みや授業時間を使い、関係者との仕入れ交渉などをしてきた。カフェ担当の山口沙織さん（17）は「よろずれば消費者に買ってもらえるのか、真剣に考えるようになった」。グループリーダーの高岡琴羅さん（17）は「ローラ先生の話を直接聞くことができて、自分たちの勉強がどんな人たちに社会の役に立つのか実感が持てた」とやりがいを語る。

生徒たちの取り組みの中の関わりを理解することがモチベーションにつながっている」と話すのは、副担任の佐竹晴伸教諭（34）。「働き甲斐をもてることで、社会に還元できるものがあると知ってもらえた」と意義を話す。

販売会に向けて、展示方法などの最終確認に力が入る。高岡さんは「自分たちが学んできたことを思う存分出し切れる販売会にしたい」と意気込んでいる。

北海道旭川商業高校では、戦前から継続的に実施している生徒実習販売会において、国際ビジネス科３年生が積極的にフェアトレード商品を取り扱い、地域への普及を目標に取り組んでいます。

資料番号：1-20-4	出所：『日経産業新聞』2011 年 8 月 3 日付 『北海道新聞』2012 年 7 月 3 日付